



開発のヒントは昭和30年代頃の「流下式塩田」の写真。

開発のきっかけは6年前、源泉を加水せずに冷ます方法を模索していた株ユーネット社長・河野氏が、大分県産業科学技術センターへ相談したことからはじまった。ヒントになったのは、大分県竹芸・訓練支援センターより見せられた「流下式塩田」の写真。昔は、全国の塩田で見られた流下式塩田の「枝条架」。この仕組みを使い、お湯を冷却できないか？と考えたのだ。さっそく冷却装置を試作し、実験を開始。竹枝の方向や高さを変化させるなど試行錯誤

を重ね、3台目の試験機では、100℃の源泉をわずか2、3秒で50℃以下に。「キツネにつままれたようでした！今まで10時間以上かけて源泉を冷ましていたんですから」と河野氏。平成17年に実用新案を取得した。

環境に優しい冷却装置として販路を拡大。

従来の冷却装置は、コストが高く、源泉が高温の場合、腐食による金属の溶出なども懸念された。しかし、竹製の「湯雨竹」は、低コスト、環境にもやさしいなどメリットが多い。導入後、「ひょうたん温泉」では、毎日長時間、

(上) 創業者が豊臣秀吉の大ファンだったことから、秀吉旗印の千成ひょうたんより「ひょうたん温泉」と命名。写真は名物の「ひょうたん風呂」。(中) 高さ2mの「湯雨竹」を利用した足湯。別府の新しい風物詩となっている。(下) ユーザーの施設規模や温泉に合わせてさまざまな形状の「湯雨竹」を提案する。



昭和30年代頃、全国の塩田で見られた流下式塩田の「枝条架」をヒントにした「湯雨竹」。

[大分県・別府市]

竹製温泉冷却装置「湯雨竹」の販売拡大

株式会社 ユーネット

Company Info.

大正時代から今日まで 源泉100%の温泉にこだわる。

湯治場として親しまれている別府・鉄輪に、大正11年に「ひょうたん温泉」を創業。現在も名物のひょうたん型内湯を中心に、滝湯、砂湯などバラエティ豊かな温泉を楽しめる施設として、全国からファンが訪れている。創業時から源泉100%の温泉にこだわるため、「湯雨竹」開発前は、夜9時に閉店し、浴槽で10時間かけて源泉を冷まして翌朝客へ提供していたが、現在は深夜1時まで営業時間を延長。平成17年に温泉へ加水有無の表示が義務づけられたが、「湯雨竹」導入後、名実ともに源泉掛け流しの名湯になる。



河野純一さん/代表取締役社長。別府温泉の素晴らしさを伝えたいという熱い想いを持つ大阪出身四代目。夢は、日本各地で、「湯雨竹」の名湯に浸かること。



○活用する地域資源：竹、竹工芸品

別府特産の竹が 100℃の源泉を 一気に冷ます。

全国屈指の温泉地・別府。100℃を超える源泉が自噴しているが、熱すぎる温泉を適温に冷ますのが、温泉経営者の課題だった。その救世主となったのが竹製温泉冷却装置「湯雨竹」だ。別府特産の竹で出来た「湯雨竹」は、100℃の源泉をたった数秒で46℃前後へ冷却。源泉掛け流しの温泉を実現し、温泉経営者と温泉ファンを喜ばせている。